長煙道カマドと俘囚の移配

－上総国北西部地域を中心に－

栗　田　則　久

目　次

1　はじめに …… 587

2　文献に見える俘囚の移配 …… 587

3　関東周辺の長煙道カマドの状況 …… 589

4　上総国の長煙道カマドが多出する遺跡 …… 589

5　各市の特徴 …… 602

6　長煙道カマドの動向と歴史的背景 …… 604

7　おわりに …… 607

1　はじめに

平成29年に開催された帝京大学文化財研究所研究成果公開シンポジウム「「俘囚・夷俘」とよばれたエミシの移配と東国社会－強制移住させられたエミシはどこに居たのか？そして何をしていたのか？－」(平野ほか2017ａ）の中で、主に関東地方で俘囚の痕跡が考古学的にどのように捉えることができるかの報告が各県から提示され、特に東北地方の住居形態の大きな特徴である「長煙道カマド」と内面黒色処理の土師器杯に代表される東北系の土器について検討が加えられた。筆者も報告する機会が与えられ、特に長煙道カマドが集中して検出された上総北西部の市原市・袖ケ浦市・木更津市の主な遺跡を取り上げて発表した（栗田2017)。県内の東北系の内面黒色処理の土器については、現状では東北産と明瞭に判断できる資料がほとんどないため、長煙道カマドを対象として検討した。ただ、８世紀後半から９・10世紀代にかけて多く出土する内面黒色処理の杯は、処理技法が東北とは異なるものの、古墳時代後期の黒色処理した杯との連続性はなく、時期的にみて東北の影響があった可能性もあるが、現状ではその可能性を指摘するに留めたい。

その後、研究連絡誌で俘囚の移配の背景などを加味して検討を行った（栗田2021)。今回は、対象とした各遺跡の集落変遷の中での長煙道カマドのあり方をさらに検討し、他地域の事例や文献上の出来事などを加えて上総への俘囚移配の背景にも触れていきたい。

2　文献に見える俘囚の移配

陸奥・出羽の「俘囚・夷俘」と称された人々の関東以西の諸国への移配が生じた直接的な出来事は、宝亀五年（774年）の陸奥の蝦夷による桃生城襲撃事件から始まって、弘仁二年（811年）の征夷将軍文室綿麻呂の終戦報告までのいわゆる「三十八年戦争」であるが、その背景には、関東地方などからの東北城柵への移民「柵戸」の存在が大きな要因となったようである。房総に関する記事としては、『続日本紀』霊亀元（715）年五月「相模・上総・常陸・上野・武蔵・下野六国の富民千戸を陸奥国に移住」、天平九（738）年四月「常陸・下総・上総・武蔵・上野・下野等六国の騎兵を動員して多賀柵を鎮守」、天平宝字三（759）年九月「坂東八国並びに越前・能登・越後等四国の浮浪人二千人を雄勝の柵戸に」、宝亀七（776）年五月「出羽国志波村の賊の反逆に対して下総･下野･常陸等の国から騎兵を動員」､『日本後紀』延暦十五年（796）年十一月「相模・武蔵・上総・常陸・上野・下野・出羽・越後等の国の民九千人を陸奥伊治城に移す」、『日本紀略』延暦二十一（802）年「駿河・甲斐・武蔵・上総・下総・常陸・信濃・上野・下野等の国の浪人四千人を陸奥国胆沢城に配置」などがあり、８世紀前半から９世紀前半にかけて度重なる移住政策が行われたようである。人の移住のみでなく、船や武具・糒（蒸して乾燥した保存用の飯）などを陸奥国に運ばせた記事もみられる。陸奥国内に東国の国や郡名と同じ郷名が多いことも多くの移住があったことを示している。房総に関しては、胆沢郡上総郷、亘理郡望陀郷があり、上総国や上総国望陀郡が想定される。このような大量の「柵戸」の移住先としては、『続日本紀』延暦八（789）年八月に記載された「牡鹿･小田･新田・長岡・志太・玉造・富田・色麻・賀美・黒川」のいわゆる黒川以北十郡で、「賊に接した地域」とも表されている。霊亀元年から始まった移住政策は、当該地域の「蝦夷」との軋轢を生じるようになった。

律令国家は当初、俘囚に対して俸禄としての布や米の支給、宴会での饗宴などの懐柔政策を行い、戸籍を付与して調庸民化＝公民化させることを目的としていたが、先述の「柵戸」の蝦夷居住境界域への大量

移住などの要因が重なることによって反乱が始まり、「三十八年戦争」へと進んでいった。三十八年戦争以前からも律令国家と蝦夷との対立が表面化していた。『続日本紀』養老四（720）年九月には、「蝦夷の反乱により按察使正五位下上毛野朝臣廣人が殺害される」、神亀元（724）年三月には、「海道蝦夷の反乱により大掾従六位上佐伯宿祢兒屋麻呂が殺害される」とある。こうした８世紀前半からの対立が顕著に表れたのが「三十八年戦争」である。蝦夷の攻撃は主要官人と城柵に対して行われ、宝亀五（774）年の桃生城攻略、宝亀十一（780）年の伊治公呰麻呂による按察使の殺害と多賀城を焼いた事件などがあり、弘仁二（811）年の終結まで長期の動乱が続いた。

戦争によって捕虜となった「俘囚」は、当初陸奥・出羽国内の監視の行き届く城や柵の近くに居住させられる一方で、増加する俘囚に対する俸禄の支給や宴会の負担などの支出が多くなり、国内の調庸の大部分を充てるようになった。そのため、俘囚の調庸民化、財政負担の諸国への分散などを目的として一部の俘囚を諸国に移住させる移配政策を進めた。移配の初見記事に、『続日本紀』神亀二（725）年正月に「陸奥国の俘囚百四十四人が伊予国に、五百七十八人が筑紫国に、十五人が和泉監（国）に移配」とあり、三十八年戦争以前から俘囚の移配が行われていたことが分かる。宝亀五年から始まる三十八年戦争以降は、移配させる俘囚が急激に増え、俘囚に与える食料や衣服の財源として「俘囚料稲」の出挙が各国で行われた（表１）。『延喜式』主税上によると、俘囚料稲を計上している国は三十五か国に上る。最も多いのは肥後国173,435束、次いで近江国の105,000束、陸奥国に接する常陸・下野国が100,000束となり、それぞれの国での移配された俘囚の人数の多さが分かる。

表１　諸国の俘囚料一覧

	国名	数量（束）	備考
東海道	常陸	100.000	安房・伊豆・三河・尾張・志摩・伊賀国は計上なし
	下総	20.000	
	上総	25.000	
	武蔵	30.000	
	相模	28.600	
	甲斐	50.000	
	駿河	200	
	遠江	26.800	
	伊勢	1.000	
東山道	下野	100.000	飛騨国は計上なし 上野国碓井・多胡・緑野郡に俘囚郷あり
	上野	10.000	
	信濃	3.000	
	美濃	41.000	
	近江	105.000	
北陸道	佐渡	2.000	若狭国は計上なし
	越後	9.000	
	越中	13.433	
	加賀	5.000	
	越前	10.000	
山陰道	出雲	13.000	丹波・丹後・但馬・石見・隠岐国は計上なし
	伯耆	13.000	
	因幡	6.000	
山陽道	備中	3.000	備後・安芸・周防・長門国は計上なし 周防国吉敷郡に俘囚郷、播磨国加古郡・賀茂・美嚢郡に夷俘あり
	備前	4.340	
	美作	10.000	
	播磨	75.000	
南海道	土佐	32.688	紀伊・淡路・阿波国は計上なし
	伊予	20.000	
	讃岐	10.000	
西海道	日向	1.101	豊前・薩摩・大隅・壱岐・対馬国は計上なし
	豊後	39.370	
	肥後	173.435	
	肥前	13.090	
	筑後	44.082	
	筑前	57.370	

数量（束）は俘囚料としての稲束数
俘囚郷・夷俘郷は『和名類聚抄』記載
武廣2017a表２より

調庸民化を目的として移配された俘囚の中には、農民化を拒むものや移配先での待遇に不満をもつものなどが現れ、９世紀になるとしばしば反乱を起こしていることが文献史料にみられる。『類聚国史』弘仁五(814)年二月の出雲国での反乱は、授位と租税の免除で沈静化させている。この他にも反乱の兆しのある国は同様の対応で未然に防止しているようである。その一方で、上総国と下総国では４件もの反乱が勃発している。『続日本後紀』嘉祥元（848）年二月には上総国で俘囚丸子廻毛らが反乱を起こし、討伐の勅符は国家から相模・上総・下総等の五国に出され、二日後に俘囚五十七人が切り殺されて反乱が収められた。反乱の主導者であった丸子廻毛は陸奥国牡鹿郡の蝦夷と考えられ、丸子一族には牡鹿連の姓が与えられたものもおり、廻毛らは単なる狩猟民や農民ではなく、上総国を越えた組織と情報網をもつ商業・運送業者であったことから、反乱が他国に広がることを恐れて五国の兵士を動員してまで討伐させたことが指摘されている（宮原2001）。『日本三代実録』貞観十二（870）年十二月には、「夷俘（俘囚）は野心が強く、民家を焼いたり、武力で人の財産を奪ったりすることがあるため、上総国に対して夷俘の教諭を指示、これに背くものは奥地に追い入れる」とあり、国家の意図を徹底させる状況が見

て取れる。また、貞観十七（875）年五月「下総守文室朝臣甘楽麻呂が、官寺を焼き、良民を殺略した俘囚の反乱を中央に報告し、武蔵・上総・常陸・下野等の国に追討を命じた」、元慶七（883）年二月には「市原郡の俘囚三十余人が反乱し、官物の盗み、人民の殺略が行われ、上総国の諸郡に命じ追討したところ、山中に逃げ込んだ」という記事がみられる。このように、上総国を中心に９世紀中葉から後葉にかけて俘囚の反乱が認められる。他国ではあまりみられない反乱が上総国で繰り返される点は注目される。宮原氏が指摘するように、丸子一族のような組織力を保持する集団の存在を想定することも必要であろう。

３　関東周辺の長煙道カマドの状況

武蔵国内の多摩川中流域の沖積微高地上に位置する東京都日野市と多摩市にまたがる落川・一の宮遺跡は、竪穴建物跡817棟の内31棟が長煙道カマドで、８世紀第４四半期～10世紀第４四半期に確認されている。長煙道が多い時期は９世紀第３四半期と10世紀第１四半期で、前者が39棟中８棟、後者が36棟中８棟で、当該期の建物総数の20％強が長煙道カマドとなる。埼玉県熊谷市（旧大里郡大里村）中堀遺跡は、鍛冶工房などの生産活動が活発に展開していた集落で、８世紀後葉から10世紀第４四半期にかけての竪穴建物跡258棟が検出された。長煙道カマドの竪穴建物跡は33棟で、本格的な集落の始まりである９世紀第１四半期は竪穴建物数５棟の内80％の４棟が長煙道カマドを有している。その後は10～25％と短煙道カマドが主体となる。集落出現当初に長煙道カマドが大半を占めることに特徴がある（平野2017ｂ）。

甲斐国では、巨麻郡家の一画とされる韮崎市宮ノ前遺跡で、146棟の竪穴建物跡の内１棟のみが長煙道カマドで他はすべて短煙道となる。山梨郡・八代郡・都留郡の大規模な遺跡も同様の傾向があり、長煙道カマドはきわめて客体的な存在である。一方、巨麻郡でも韮崎市に隣接した南アルプス市域に所在する百々遺跡は、中世八田牧の前身とも想定され、中堀遺跡同様９世紀に突如として集落が出現し、11世紀代まで継続する。この遺跡では竪穴建物跡171棟中40％以上の71棟が長煙道カマドを有する。集落出現段階の９世紀前葉で35棟、当該時期の建物数の50％と高い比率を占めている（平野2017ｂ）点は、後述する上総地域と似た状況が伺える。相模国では、西側の余綾郡での長煙道カマドの比率が高くなっており、特に郡北部の秦野盆地（幡多郷）では70％に及び、長煙道カマドの中心地域となる（田尾2017）。下総国内では８遺跡13例が確認されたのみで、複数例検出された遺跡をあげると、八千代市権現後遺跡では奈良・平安時代の竪穴建物跡68棟中３棟、八千代市上谷遺跡で201棟中２棟、佐倉市高岡大山遺跡で416棟中３棟のみで、きわめて客体的な存在となり、長煙道カマドが定着しなかった地域といえる（郷堀2017）。常陸国では、鹿嶋郡域と多珂郡域に集中する傾向にあるが、短煙道に対する比率は少ない（佐々木・早川2017）。

このような関東周辺の状況と比較して注目した地域が、上総国の東京湾東岸地域である。シンポジウム及び研究連絡誌で提示した遺跡を中心に検討を加えた。なお、煙道部が80cm以上の長さのあるものを長煙道とした。

４　上総国の長煙道カマドが多出する遺跡

ここでは、長煙道カマドが集中して確認された市原市・袖ケ浦市・木更津市、古代の郡では市原郡・海上郡・望陀郡の範囲に属すると推定される遺跡を取り上げる。なお、時期区分については、８世紀及び９世紀を四半世紀ごとにⅠ期（８世紀第１四半期）～Ⅷ期（９世紀第４四半期）、10世紀・11世紀をそれぞれ前葉・中葉・後葉に分けて、Ⅸ期（10世紀前葉）～ⅩⅣ期（11世紀後葉）とする（図１）。なお、各遺構の時期

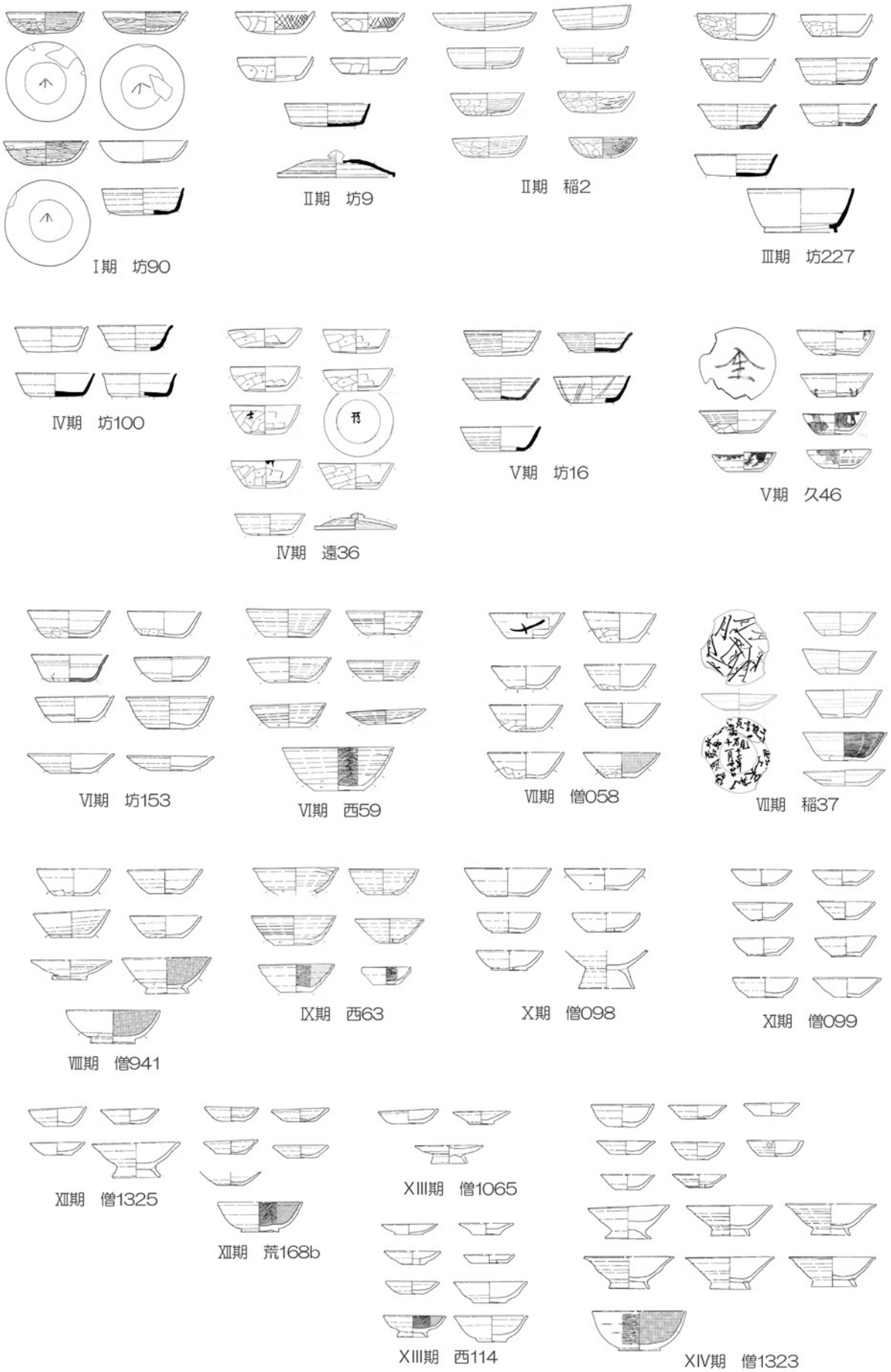


図１　土器変遷図　縮尺1/10

遺跡略称　坊：坊作遺跡、稲：稲荷台遺跡、遠：永吉台遺跡群遠寺原地区、久：久野遺跡、西：永吉台遺跡群西寺原地区、僧：上総国分僧寺、荒：荒久遺跡Ｂ地点

※略称の後の数字は遺構番号

については、それぞれの報告書の年代を参考に、筆者の判断により各期に振り分けている。また図２のＡ～Ｄはカマド煙道部の縦断面のタイプで、地表に向けて傾斜しながら上昇するのがＡ、煙道が下方に傾斜し、最下端が床面より高い位置のあるのがＢ、煙道最下端が床面より低くなるものをＣ、煙道がほぼ水平となるものをＤとした。また、各遺跡のグラフ中の不明の中には、平面図では長煙道となるものの縦断面の記載がなくタイプが判断できないものも含まれている。

図２　長煙道カマドのタイプ別分類
（北東北古代集落研究会2014）

Ａ市原市

上総国分僧寺（図４・５・６）

検出された遺構は、基壇跡８基、礎石建物跡８棟、掘立柱建物跡100棟、竪穴建物跡295棟、小鍛冶跡６基、梵鐘鋳造遺構１基などである。遺物としては、土師器･須恵器のほか、灰釉陶器、奈良三彩陶器、緑釉陶器、初期貿易陶磁器、「金寺」や「東院」･「厨」･「油菜所」などの墨書土器、フイゴの羽口・トリベなどの金属生産関連遺物などがあり、遺跡の性格を考えるうえで重要な資料となっている。

集落は、後述する荒久遺跡B地点よりやや遅れてⅡ期から出現するが、建物数10棟と比較的大きな集落が形成される。続くⅢ期も同様の規模で、この時期は仮設的な国分寺造営の開始から本格的な伽藍造成に移行する時期と重なっており、それらに関わっ

図３　遺跡位置図

図４　上総国分僧寺・荒久遺跡全体図

た集落となる可能性が高い。Ⅳ期～Ⅵ期は建物数が減少するが、９世紀後葉となるⅦ期・Ⅷ期は急激に集落規模が肥大化する。８世紀後葉には官衙的な配列の政所院が成立し、機能が維持される９世紀中葉頃までは竪穴建物数が少なく、これらの施設が衰退するⅦ・Ⅷ期に竪穴建物数が激増する。10世紀段階のⅨ期～Ⅺ期は20棟前後で推移するが、11世紀段階には再び建物数が激減する。長煙道カマドは集落開始当初のⅡ期から採用されている。Ⅱ期・Ⅲ期は総建物数の60％ほどが長煙道であるが、集落規模の小さいⅣ期～Ⅵ期は短煙道が多くなり、その傾向は竪穴建物数が最大となるⅦ期・Ⅷ期にもみられる。10世紀代は短煙道が主体で、最終段階となる11世紀代では、建物数が少ないものの、すべて短煙道カマドを付設している。長煙道のタイプは、集落開始時期のⅡ期はBが多く、Ⅲ期・Ⅳ期にも一定数みられる。煙道部が水平となるDはⅢ・Ⅶ期に集中する。Ⅴ期に姿を消したＢはⅦ期で22棟中13棟に採用され、Ⅷ期まで継続する。

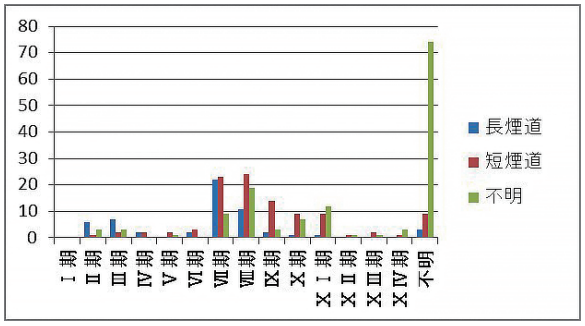


図５　上総国分僧寺カマド種別グラフ

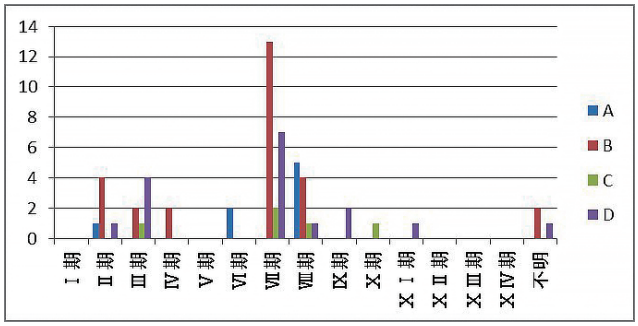


図６　上総国分僧寺長煙道カマドタイプ別グラフ

※縦軸：竪穴建物棟数　横軸：時期（以下のグラフ同様）

荒久遺跡Ｂ地点（図４・７・８）

西側に上総国分僧寺が隣接する。この遺跡は、国分僧寺建立を契機として集落が形成されており、後述する坊作遺跡と国分尼寺の関係と共通する。奈良・平安時代の竪穴建物跡255棟、掘立柱建物跡６棟などが検出され、国分寺台地区では上総国分僧寺に次ぐ大きな遺跡である。出土した遺物には、二彩・三彩陶器、緑釉陶器、灰釉陶器などの施釉陶器や初期貿易磁器、和鏡・鈴などの銅製品、錠前などの鉄製品、トリベ・羽口などの土製品、温石などの石製品など、遺跡の性格を伺わせる資料が多く含まれている。なお、Ｃ地点でも多くの長煙道カマドを持つ竪穴建物跡が検出されているが、カマド図が掲載されていないものが多く、ここでは取り扱わないこととした。

集落はⅠ期から出現し、上総国分僧寺とほぼ同じⅩⅣ期まで継続する長期にわたる集落である。集落規模はⅣ期から大きくなり、Ⅶ期をピークとしてⅥ期～Ⅷ期に多くの建物が集中する。Ⅸ期以降は急激に小規模な集落景観を呈するようになる。長煙道はⅡ期から姿を見せる。カマドが不明の建物も多くあり、明

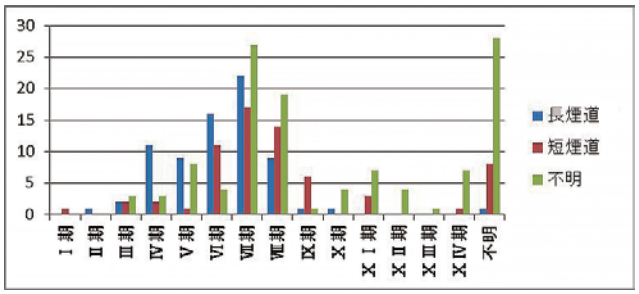


図７　荒久遺跡B地点カマド種別グラフ

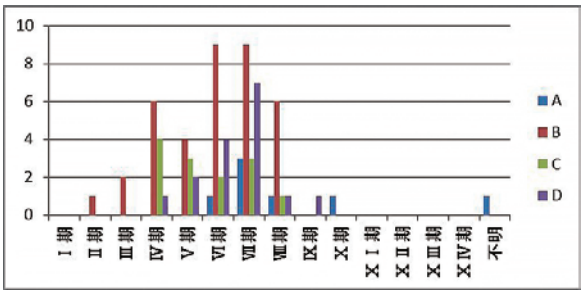


図８　荒久遺跡B地点長煙道カマドタイプ別グラフ

確とは言えないが、長煙道の比率はⅣ～Ⅵ期が50％以上と高く、Ⅵ期以降短煙道が徐々に多くなり、Ⅷ期で短煙道と長煙道の比率が逆転する。Ⅸ期は長煙道の建物が１棟のみとなり、Ⅺ期以降の建物はすべて短煙道となる。長煙道のタイプでは、Ⅱ・Ⅲ期はＢのみで、Ⅳ期以降にＣ・Ｄが加わるようになる。また、Ｂ～Ｄが確認されるⅣ～Ⅷ期でもＢが主体となる傾向がみられる。なお、ＡのカマドはⅥ期以降で、数的にも客体の存在である。

坊作遺跡（図９・10・11）

南側に上総国分尼寺跡が隣接する。調査の結果、縄文時代早期の陥穴や弥生時代後期の集落が形成された後に古墳時代の空白期間を経て、奈良・平安時代の掘立柱建物群を含む大規模な集落が営まれていることが明らかとなった。また、隣接する国分尼寺の造営を契機として出現した集落であることも確認されている。奈良・平安時代の遺構は、竪穴建物跡119棟、掘立柱建物跡30棟の他、鍛冶遺構２基、貝ブロックを含む土坑61基などである。

奈良・平安時代の集落は、国分尼寺建立時期に相当するⅡ期に比較的大きな集落が形成され、Ⅲ期をピークとしてⅨ期まで継続している。竪穴建物総数119棟の内、約半数の61棟で長煙道が確認される。時期ごとの長煙道と短煙道の比率は、集落が本格化するⅡ期は同数であるが、Ⅲ期～Ⅵ期は長煙道が多く、Ⅴ期・Ⅵ期は長煙道が多数を占め、特にⅥ期は９棟すべてが長煙道となる。一方、Ⅵ期に姿を消した短煙道は、Ⅶ期以降再び姿を現し、長煙道を上回るようになる。長煙道のタイプは、Ⅱ期まではＡ・Ｄのみであるが、Ⅲ期になると煙道部が下向するＢが主体を占める。また、Ⅵ・Ⅶ期には煙道部下端が火床部底面より低くなるＣが集中する。

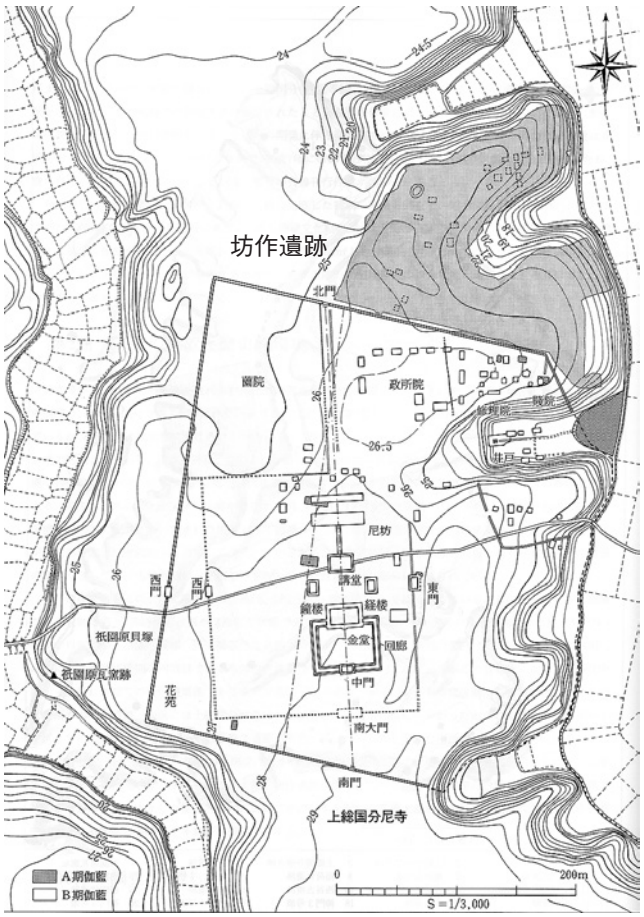


図９　上総国分尼寺と坊作遺跡

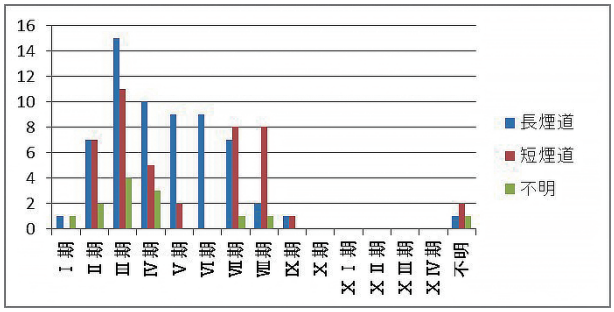


図10　坊作遺跡カマド種別グラフ

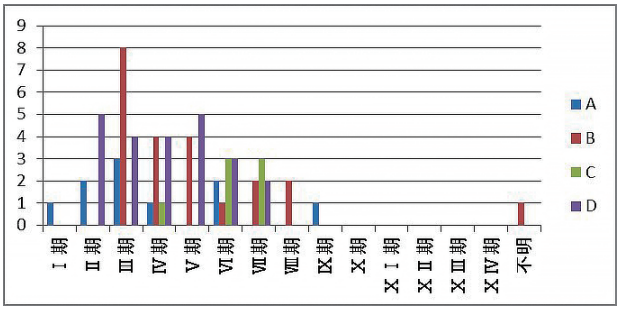


図11　坊作遺跡長煙道カマドタイプ別グラフ

稲荷台遺跡（図12・13・14）

Ａ～Ｇの７からなる遺跡で、11,800㎡の調査範囲から、奈良・平安時代の竪穴建物跡77棟、掘立柱建物跡45棟の他、祭祀関連遺構17基や古代道などが検出されている。「王賜銘」鉄剣を出土した稲荷台１号墳をはじめとして古墳時代中期から後期の古墳群が形成されているが、古墳時代の集落は存在せず、この時期、墓域として台地上が利用されていたようである。本遺跡の中心となる地区は、調査範囲北東側に位置するＥ地区となる。竪穴建物跡45棟、掘立柱建物跡41棟の他、祭祀遺構や護摩を焚いたと想定されている焼土堆積箇所などが集中して営まれており、竪穴建物跡と掘立柱建物跡が共存している状況が伺える。この区域の出土遺物には、多量の緑釉陶器・灰釉陶器、金銅製帯金具や海老錠など、一般集落とは異なる資料が多く含まれている。同じ区域内からは墨書土器も多く出土し、「国厨」・「市厨」・「京」などは本遺跡の性格を示すものとして注目される。また、「貞観十七年十一月廿四日」は紀年銘墨書土器として知られている。この遺跡については、E地区の官衙的な建物配置や多量の施釉陶器の出土、古代道や国家的祭祀行為などから、上総国府との強い関係性が想定されている。

図12　稲荷台遺跡全体図

集落の開始は８世紀第２四半期となるⅡ期で、Ⅲ期以降やや集落規模が大きくなる。集落の盛期はⅥ～Ⅸ期で、E地区の掘立柱建物群もほぼこの時期と想定されている。Ⅹ期以降は小規模な集落となり、11世紀前葉となるⅩⅡ期まで継続している。短煙道カマドは集落の出現から終息に至るまで採用されている。長煙道と短煙道の比率をみると、Ⅲ～Ⅶ期は長煙道カマドが主体となる。Ⅷ期で再び短煙道が主体となり、Ⅸ期以降は長煙道カマドが採用されていない可能性が高い。煙道部のタイプは、Ⅲ期はＤが多いものの、

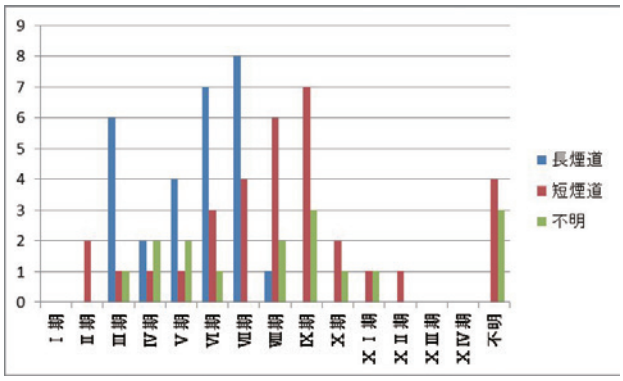


図13　稲荷台遺跡カマド種別グラフ

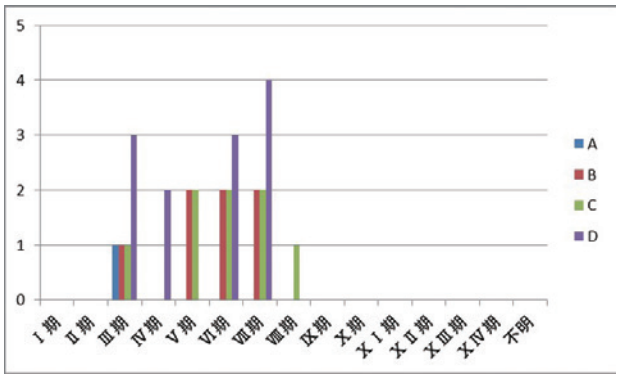


図14　稲荷台遺跡長煙道カマドタイプ別グラフ

Ａ～Ｃも確認される。Ⅳ期以降は煙道部が上昇するＡは確認されず、Ⅵ期・Ⅶ期はＢ～Ｄがそれぞれ複数存在する。

表２　市原市各遺跡時期別カマド属性表

	総竪穴棟数		Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期	Ⅴ期	Ⅵ期	Ⅶ期	Ⅷ期	Ⅸ期	Ⅹ期	ⅩⅠ期	ⅩⅡ期	ⅩⅢ期	ⅩⅣ期	不明	合計
上総国分僧寺	295	A		1				2		5								8
		B		4	2	2			13	4							2	27
		C			1				2	1		1						5
		D		1	4				7	1	2		1				1	17
		長煙道計		6	7	2		2	22	11	2	1	1				3	57
		短煙道		1	2	2	2	3	23	24	14	9	9	1	2	1	9	102
		不明		3	3		1		9	19	3	7	12	1	1	3	74	136
		総建物数		10	12	4	3	5	54	54	19	17	22	2	3	4	86	295
		長煙道比率		60.0%	58.3%	50.0%	0.0%	40.0%	40.7%	20.4%	10.5%	5.9%	4.5%	0.0%	0.0%	0.0%	3.5%	
		短煙道比率		10.0%	16.7%	50.0%	66.7%	60.0%	42.6%	44.4%	73.7%	52.9%	40.9%	50.0%	66.7%	25.0%	10.5%	
荒久遺跡 B地点	255	A						1	3	1		1					1	7
		B		1	2	6	4	9	9	6								37
		C				4	3	2	3	1								13
		D				1	2	4	7	1	1							16
		長煙道計		1	2	11	9	16	22	9	1	1					1	73
		短煙道	1		2	2	1	11	17	14	6		3			1	8	66
		不明			3	3	8	4	27	19	1	4	7	4	1	7	28	116
		総建物数	1	1	7	16	18	31	66	42	8	5	10	4	1	8	37	255
		長煙道比率		100.0%	28.6%	68.8%	50.0%	51.6%	33.3%	21.4%	12.5%	20.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.7%	
		短煙道比率		0.0%	28.6%	12.5%	5.6%	35.5%	25.8%	33.3%	75.0%	0.0%	30.0%	0.0%	0.0%	12.5%	21.6%	
坊作遺跡	119	A	1	2	3	1		2			1							10
		B			8	4	4	1	2	2							1	22
		C				1		3	3									7
		D		5	4	4	5	3	2									23
		長煙道計	1	7	15	10	9	9	7	2	1						1	62
		短煙道		7	11	5	2		8	8	1						2	44
		不明	1	2	4	3			1	1							1	13
		総建物数	2	16	30	18	11	9	16	11	2						4	119
		長煙道比率	50.0%	43.8%	50.0%	55.6%	81.8%	100.0%	43.8%	18.2%	50.0%						25.0%	
		短煙道比率	0.0%	43.8%	36.7%	27.8%	18.2%	0.0%	50.0%	72.7%	50.0%						50.0%	
稲荷台遺跡	77	A			1													1
		B			1		2	2	2									7
		C			1		2	2	2	1								8
		D			3	2		3	4									12
		長煙道計			6	2	4	7	8	1								26
		短煙道		2	1	1	1	3	4	6	7	2	1	1			4	33
		不明			1	2	2	1		2	3	1	1				3	16
		総建物数		2	8	5	7	11	12	9	10	3	2	1			7	77
		長煙道比率		0.0%	75.0%	40.0%	57.1%	63.6%	66.7%	11.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%			0.0%	
		短煙道比率		100.0%	12.5%	20.0%	14.3%	27.3%	33.3%	66.7%	70.0%	66.7%	50.0%	100.0%			57.1%	

B袖ケ浦市

永吉台遺跡群西寺原地区（図15・16・17・18）

本地区では、竪穴建物跡133棟（土器生産工房約20棟含む）、掘立柱建物跡８棟、土器焼成遺構60基などが検出され、９世紀後半以降、主に土師器生産を行っていた集落である。集落の開始はⅣ期で、Ⅵ期に急激に集落規模が大きくなり、Ⅷ期にやや減少するものの、10世紀中葉となるⅩ期に最多の竪穴建物が営まれる。Ⅺ期に竪穴建物数が激減し、Ⅻ期を最後に姿を消す。Ⅵ～Ⅹ期の集落の隆盛時期は土師器生産が盛んに行われた時期と重なる。長煙道カマドは集落開始時期から採用され、集落が大きくなるⅥ・Ⅶ期は、90％以上が長煙道となる。Ⅷ期以降はカマド不明が多く明確ではないが、Ⅷ期に短煙道が主となり、Ⅸ期は長煙道１基のみ、Ⅹ期以降は短煙道のみとなる。長煙道のタイプでは、ＤがⅥ・Ⅶ期を中心にⅤ期からⅧ期にみられる。Ｂは長煙道カマドが採用されるⅣ～Ⅸ期にみられ、Ⅶ期が10基、他の時期は

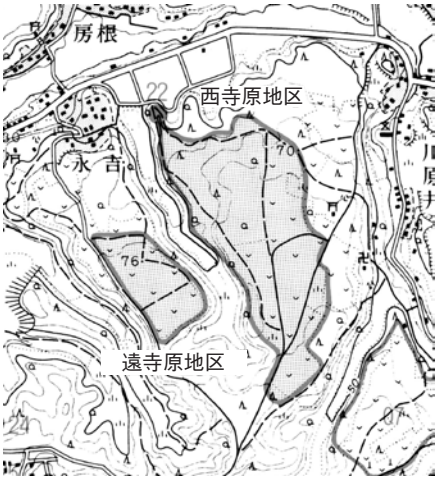


図15　永吉台遺跡群位置図

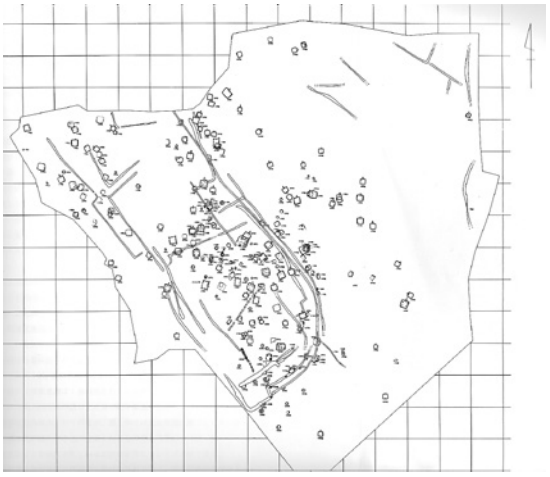


図16　西寺原地区全体図

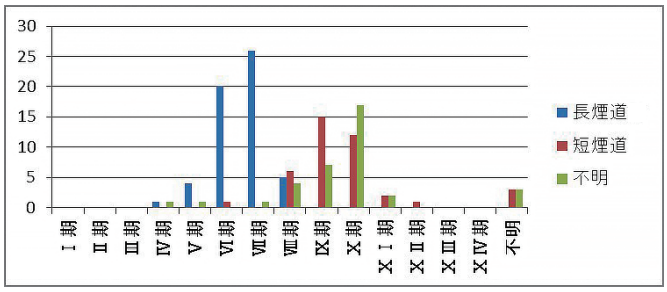


図17　西寺原地区カマド種別グラフ

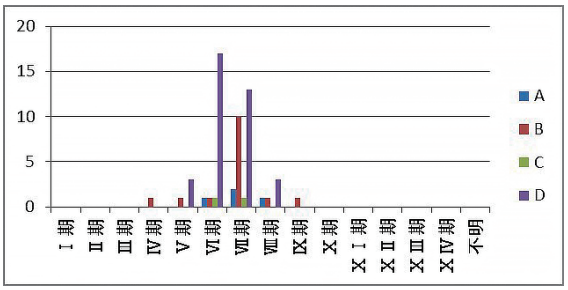


図18　西寺原地区カマドタイプ別グラフ

すべて１基のみである。

永吉台遺跡群遠寺原地区（図15・19・20・21）

当該地区では、竪穴建物跡57棟、掘立柱建物跡17棟などが検出されている。調査区東側に集中する掘立柱建物群は、四面廂建物や僧房と思われる長大な建物の存在、「西寺」･「土寺」･「僧」などの仏教関係の墨書土器、土師製の香炉蓋や瓦塔の出土などから、寺を構成する建物群と考えられる。また、出土した平瓦は上総国分寺の平瓦に類似しており、その関連性が注目されている。集落の開始は、隣接する西寺原地区より早いⅡ期であるが、Ⅲ期にかけて検出された建物跡は各期１棟のみで、西寺原遺跡の出現時期であるⅣ期に９棟と拡大する。10棟前後の規模でⅧ期まで安定的な集落が継続しているが、10世紀に入るⅨ期に減少し、Ⅹ期を最後に終息する。寺と思われる掘立柱建物群はⅣ～Ⅷ期まで機能していたようであり、寺の建立・維持・管理に関わった集落ということができよう。

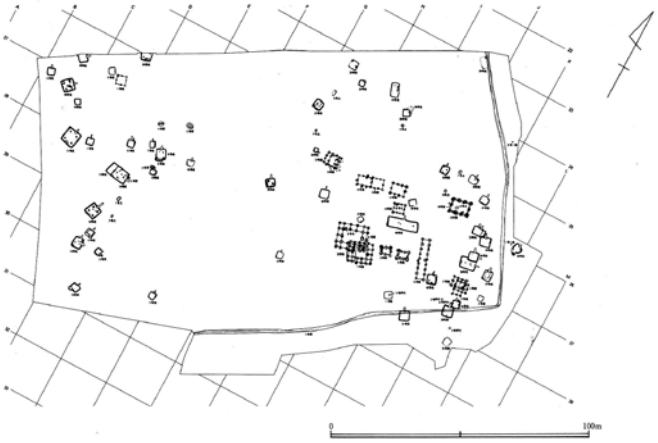


図19　遠寺原地区全体図

長煙道カマドは集落の出現段階から存在し、短煙道はⅦ期まではきわめて客体的な存在となる。次のⅧ期に短煙道が半数を占めるようになり、集落が終息に向かうⅨ期以降は短煙道のみ確認される。長煙道のタイプ別では、ＢとＤがほとんどで、Ⅴ期でＢ、Ⅵ期でＤが主体となる傾向がみられる。

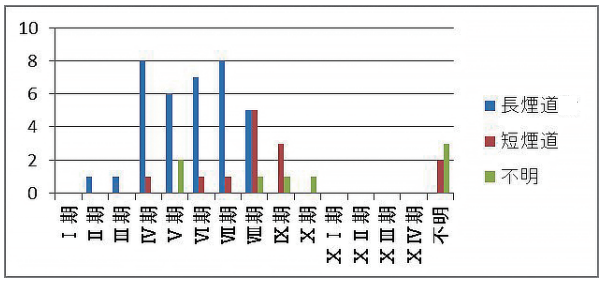


図20　遠寺原地区カマド種別グラフ

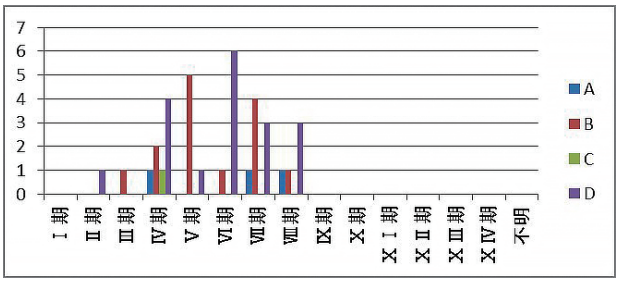


図21　西寺原地区長煙道カマドタイプ別グラフ

上大城１・Ⅱ遺跡（図22・23・24）

市道と椎の森工業団地建設に伴う２回の調査により、竪穴建物跡64棟、掘立柱建物跡17棟などが検出された。この遺跡の大きな特徴としてあげられるのが仏教関連遺物である。土師器の香炉蓋が１棟の竪穴建物跡から３点まとまって出土しているほか、二彩と灰釉の浄瓶、緑釉唾壺、水瓶、「山寺□」線刻土器、「寺」・「佛」墨書土器などが確認されており、これらの遺物は９世紀前半の所産と考えられている。他に４個体分の瓦塔の出土も注目される。須恵質２個体、土師質２個体で、時期はやはり９世紀前葉頃である。一方、多文字を伴う人面墨書土器の出土も特筆される。９世紀第２四半期の土師器甕の胴部外面に、不鮮明ながら人面と縦位に５行の文字が確認される。釈文は、「司／□（益ヵ）□家／海□（上ヵ）狭井／郷春部直／臣主女」と判読された。このことから、上総国海上郡狭井郷の春部直臣主女という人物の存在とともに、海上郡に春部＝春日部・春日部直が分布していたことが明らかとなった。また、掘立柱建物跡の柱の抜き取りが行われた後の柱穴内への鉄滓の廃棄から、調査範囲内では製鉄関係遺構は検出されなかったものの、周辺に当該遺構が存在している可能性もある。

集落の出現はⅢ期で、ピークはⅣ期、Ⅴ・Ⅵ期にも安定した集落が営まれている。６棟の竪穴建物跡で構成されるⅧ期を最後に突如として姿を消している。長煙道カマドは集落開始時点からみられ、Ⅲ・Ⅳ期のカマド不明の各２棟以外はすべて長煙道となる。短煙道はⅤ期から確認されるが、Ⅴ・Ⅵ期は各１棟のみで、竪穴建物数が少なくなるⅦ期･Ⅷ期に短煙道が各２基存在する。長煙道カマドのタイプ別では、Ａ･Ｂ・Ｄがほぼ同数で、Ｂ・ＤがⅣ期、ＡがⅤ・Ⅵ期に多く認められる。

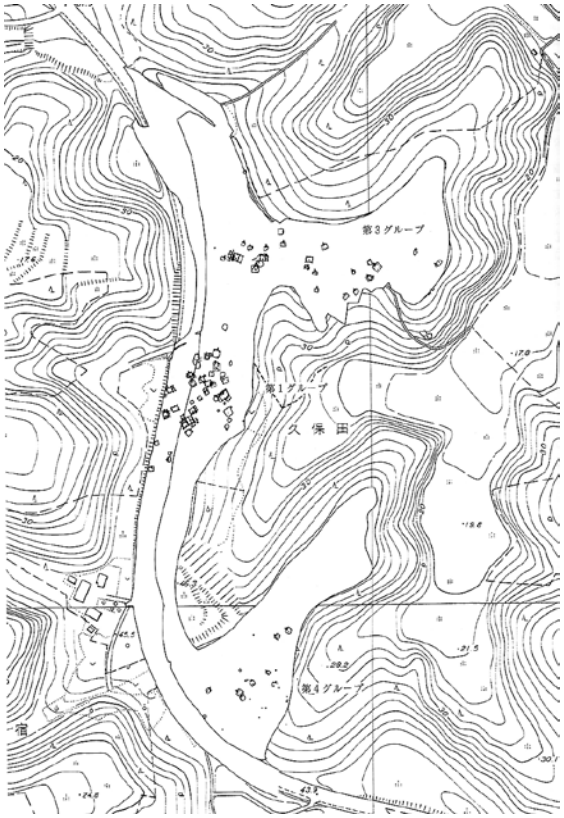


図22　上大城遺跡全体図

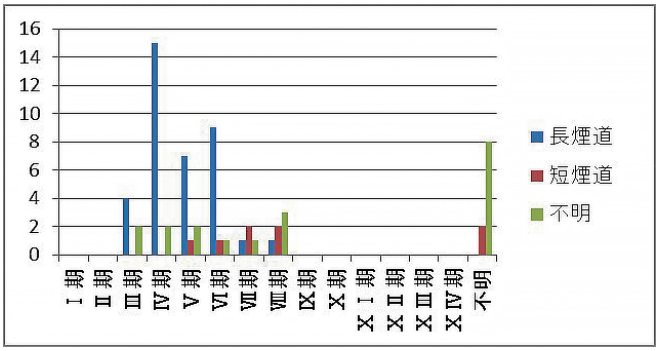


図23　上大城遺跡カマド種別グラフ

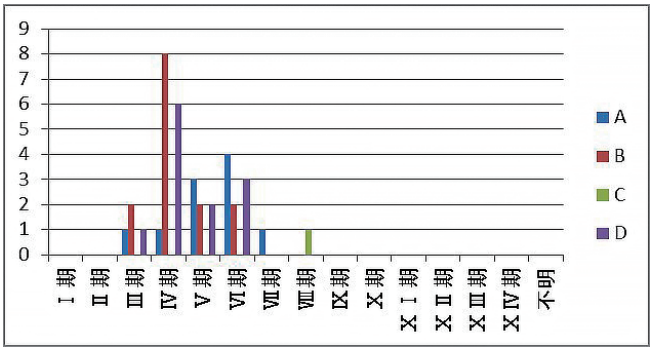


図24　上大城遺跡長煙道カマドタイプ別グラフ

八重門田遺跡（図25・26）

上大城遺跡東側の小支谷を挟んだ台地上に位置する。遺構の分布は比較的散漫で、竪穴建物跡14棟、掘立柱建物跡１棟、鍛冶工房跡４基などが検出された。集落の形成時期は短期間で、Ⅳ期に竪穴建物９棟、Ⅴ期に４棟確認されたのみである。時期不明の１棟もいずれかの時期に属するものと思われる。長煙道カマドはすべての竪穴建物に採用されている。タイプ別ではB・Dが多く、AはⅤ期のみにみられる。

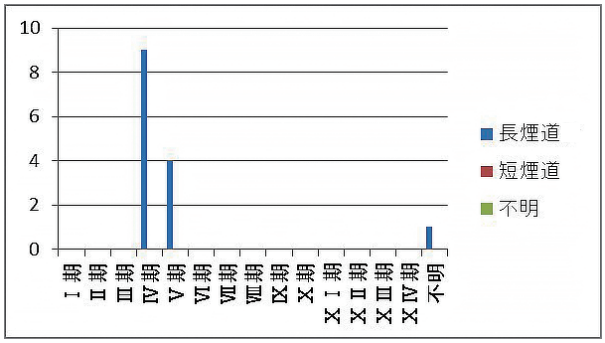


図25　八重門田遺跡カマド種別グラフ

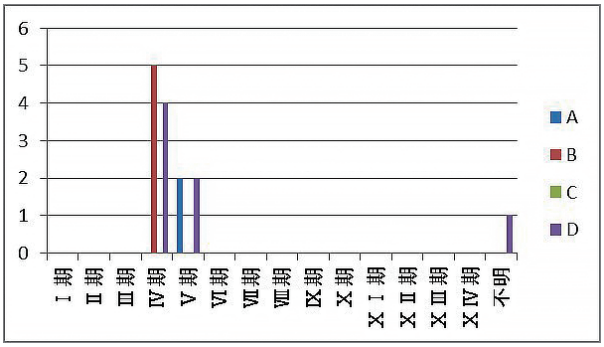


図26　八重門田遺跡長煙道カマドタイプ別グラフ

この遺跡の大きな特徴は鍛冶工房跡群の存在である。遺跡北側の東斜面の僅かな平坦地に立地し、炉の構造や鍛造剥片の出土などから、精錬から鍛錬工程の操業に関する工房と想定されている。また、鉄滓や羽口が多量に出土していることから、比較的短期間に集中的な製鉄が行われた可能性が高く、その時期は集落の形成時期であるⅣ期～Ⅴ期と考えられる。鍛冶工房群に近い１棟の竪穴建物跡からは、棒状の鉄製品が多量に出土しており、鍛冶との関係が想定される。

上宮田台遺跡（図27・28）

小櫃川左岸の木更津市との境界近くに位置する遺跡で、奈良・平安時代の竪穴建物跡17棟、掘立柱建物跡６棟、鍛冶遺構１基などが検出された。集落は７世紀代に竪穴建物17棟が確認されるが、その後の空白期間を挟んでⅢ期に４棟、Ⅳ期に９棟と奈良時代の短期間に形成された集落といえる。長煙道カマドはⅢ期で３棟、Ⅳ期で５棟存在し、長煙道の割合が高い。タイプ別ではＢ・Ｄのみ確認される。

この遺跡は、八重門田遺跡と同様の鉄器生産に特化した生産遺跡ということができる。鍛冶遺構から出土した遺物の化学分析から、精錬と鍛錬の作業が行われていたことが確認されており、素材として搬入された製錬系遺物も含め、それぞれの作業に伴って発生する各種遺物がそろっていることも判明している。

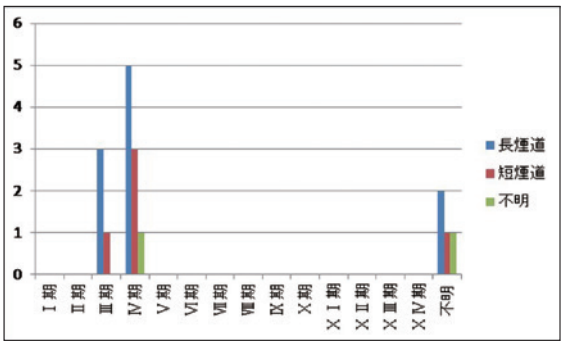


図27　上宮田台遺跡カマド種別グラフ

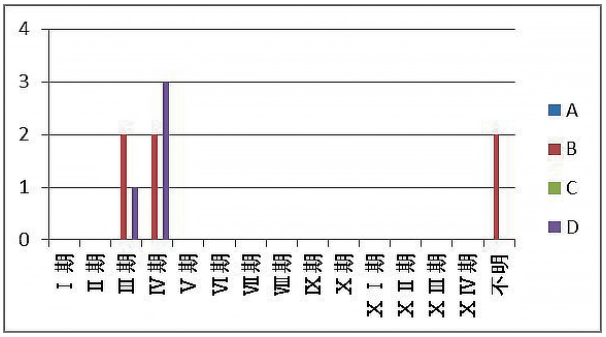


図28　上宮田台遺跡長煙道カマドタイプ別グラフ

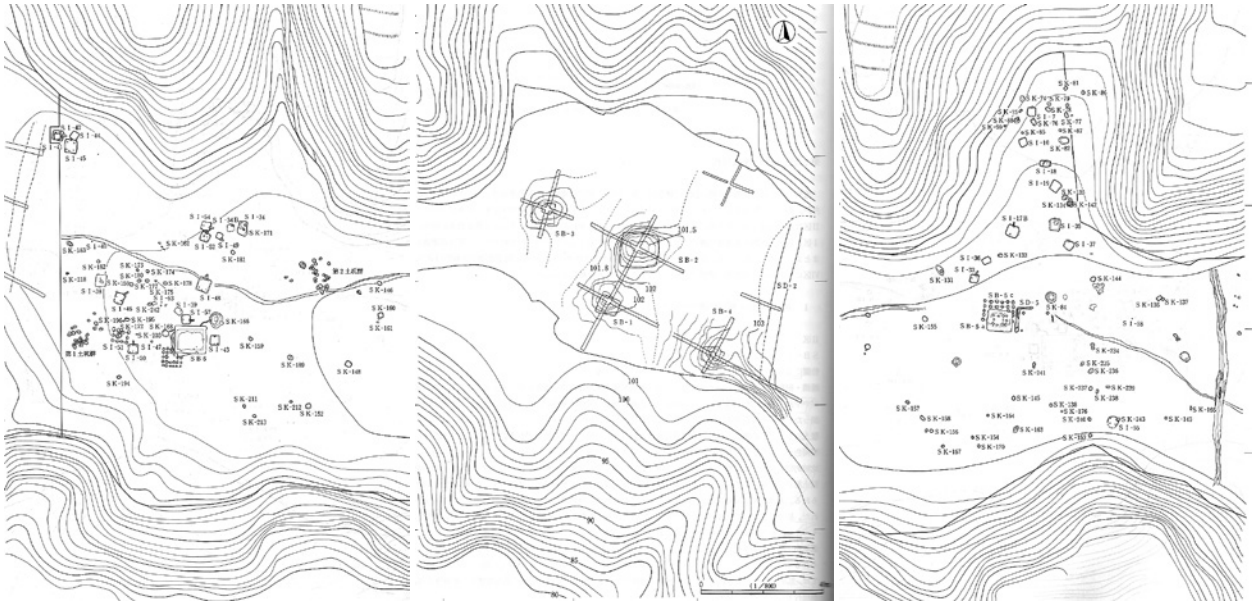
表３　袖ケ浦市各遺跡時期別カマド属性表

	総竪穴棟数		Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期	Ⅴ期	Ⅵ期	Ⅶ期	Ⅷ期	Ⅸ期	Ⅹ期	ⅩⅠ期	ⅩⅡ期	ⅩⅢ期	ⅩⅣ期	不明	合計
永吉台遺跡群 西寺原遺跡	133	A						1	2	1								4
		B				1	1	1	10	1	1							15
		C						1	1									2
		D					3	17	13	3								36
		長煙道計				1	4	20	26	5								57
		短煙道						1		6	15	12	2	1			3	40
		不明				1	1		1	4	7	17	2				3	36
		総建物数				2	5	21	27	15	22	29	4	1			6	133
		長煙道比率				50.0%	80.0%	95.2%	96.3%	33.3%	4.5%	0.0%	0.0%	0.0%			0.0%	
		短煙道比率				0.0%	0.0%	4.8%	0.0%	40.0%	68.2%	41.4%	50.0%	100.0%			50.0%	
永吉台遺跡群 遠寺原遺跡	57	A				1			1	1								3
		B			1	2	5	1	4	1								14
		C				1												1
		D		1		4	1	6	3	3								18
		長煙道計		1	1	8	6	7	8	5								36
		短煙道				1		1	1	5	3						2	13
		不明					2			1	1	1					3	8
		総建物数		1	1	9	8	8	9	11	4	1					5	57
		長煙道比率		100.0%	100.0%	88.9%	75.0%	87.5%	88.9%	45.5%	0.0%	0.0%					0.0%	
		短煙道比率		0.0%	0.0%	11.1%	0.0%	12.5%	11.1%	45.5%	75.0%	0.0%					40.0%	
上大城遺跡Ⅰ・Ⅱ	64	A			1	1	3	4	1									10
		B			2	8	2	2										14
		C								1								1
		D			1	6	2	3										12
		長煙道計			4	15	7	9	1	1								37
		短煙道					1	1	2	2							2	8
		不明			2	2	2	1	1	3							8	19
		総建物数			6	17	10	11	4	6							10	64
		長煙道比率			66.7%	88.2%	70.0%	81.8%	25.0%	16.7%							0.0%	
		短煙道比率			0.0%	0.0%	10.0%	9.1%	50.0%	33.3%							20.0%	
八重門田遺跡	14	A					2											2
		B				5												5
		C																0
		D				4	2										1	7
		長煙道計				9	4										1	14
		短煙道																0
		不明																0
		総建物数				9	4										1	14
		長煙道比率				100.0%	100.0%										100.0%	
		短煙道比率				0.0%	0.0%										0.0%	
上宮田台遺跡	17	A																0
		B			2	2											2	6
		C																0
		D			1	3												4
		長煙道計			3	5											2	10
		短煙道			1	3											1	5
		不明				1											1	2
		総建物数			4	9											4	17
		長煙道比率			75.0%	55.6%											50.0%	
		短煙道比率			25.0%	33.3%											25.0%	

Ｃ木更津市

久野遺跡（図29・30・31）

奈良時代になって台地上に集落が形成された遺跡で、竪穴建物跡32棟、基壇建物跡６棟、掘立柱建物跡4棟、鍛冶関連遺構８基などが検出された。集落の開始はⅢ期であるが、Ⅵ期までは竪穴建物２～３棟と



Ⅰ区　　Ⅱ区　　Ⅲ区

図29　久野遺跡全体図（部分、Ⅰ～Ⅲ区）

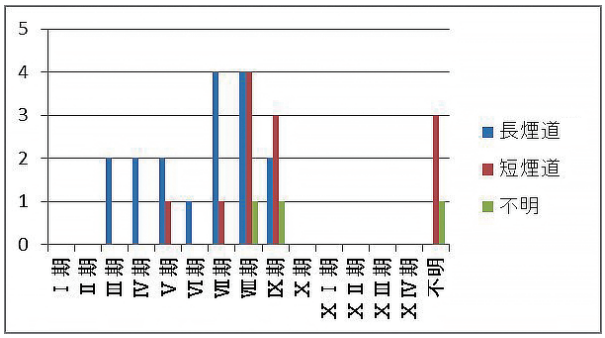


図30　久野遺跡カマド種別グラフ

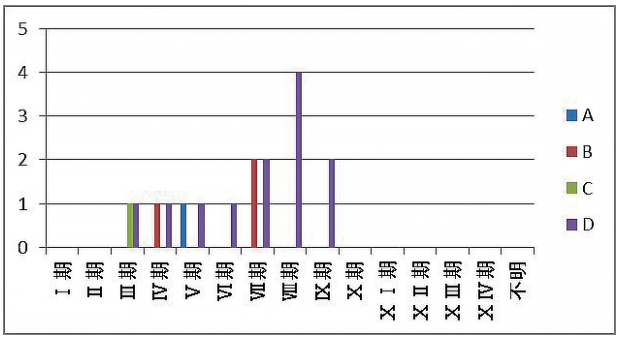


図31　久野遺跡長煙道カマドタイプ別グラフ

少なく、Ⅶ期以降建物数が増加する。カマドは、建物数の少ないⅢ期～Ⅵ期で、１棟が短煙道となる以外はすべて長煙道、Ⅶ期も同様で、Ⅷ期以降に短煙道が約半数を占めるようになる。タイプ別では、煙道が水平に延びるDが主体である。

本遺跡の特徴としてあげられるのが寺と鍛冶である。基壇建物跡がⅡ区に４棟確認され、中心建物の周囲に３棟の付属建物が配置された小規模な伽藍とみることもできる。中心建物周辺から出土した平瓦などから、集落開始当初のⅢ期に建立されたことが指摘されている。遺跡の立地からして、いわゆる「山林寺院」の建立を中心とした台地上の開発が行われたことが想定される。次の時期には、Ⅲ区に２棟の基壇建物と四面廂の掘立柱建物が新たに建てられ、寺院域の拡大がみられる。一方、集落の拡大とともに遺跡東側のⅤ区に鍛冶遺構が出現し、寺院の補修などに供する鉄器生産が行われていたようである。

上箕ヶ入遺跡（図32・33・34）

上箕ヶ入遺跡は久野遺跡の南1.5kmに位置する。検出された遺構は、竪穴建物跡17棟、掘立柱建物跡３棟などである。集落の出現はⅤ期で、Ⅵ期にピークとなり、Ⅶ期に早くも終焉を迎える。カマドは不明の２棟を除きすべて長煙道で、Ｂ・Ｄタイプが主体となる。

この遺跡の特徴は、久野遺跡同様、仏教的な遺構・遺物と鉄器生産である。仏具と思われる土師器の香炉蓋や灰釉の水瓶が出土しており、南北に並ぶ掘立柱建物跡は小規模なお堂と想定される。また、鉄滓や羽口・金床石などの製鉄遺物も検出され、鍛冶遺構は確認されていないものの、周辺で鉄器生産が行われていた可能性が高い。

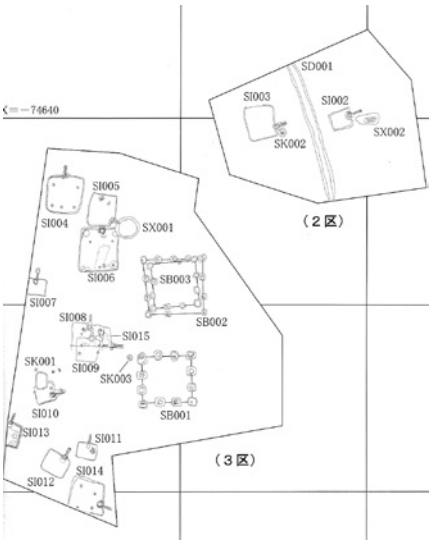


図32　上箕ヶ入遺跡全体図

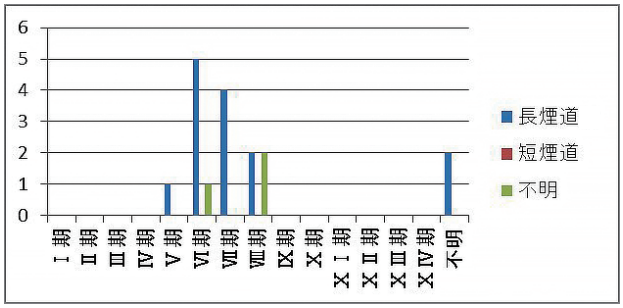


図33　上箕ヶ入遺跡カマド種別グラフ

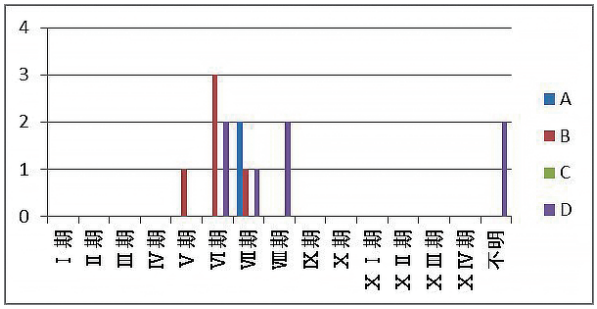


図34　上箕ヶ入遺跡長煙道カマドタイプ別グラフ

表３　木更津市各遺跡時期別カマド属性表

	総竪穴棟数		Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期	Ⅴ期	Ⅵ期	Ⅶ期	Ⅷ期	Ⅸ期	Ⅹ期	ⅩⅠ期	ⅩⅡ期	ⅩⅢ期	ⅩⅣ期	不明	合計
久野遺跡	32	A					1											1
		B				1			2									3
		C			1													1
		D			1	1	1	1	2	4	2							12
		長煙道計			2	2	2	1	4	4	2							17
		短煙道					1		1	4	3						3	12
		不明								1	1						1	3
		総建物数			2	2	3	1	5	9	6						4	32
		長煙道比率			100.0%	100.0%	66.7%	100.0%	80.0%	44.4%	33.3%						0.0%	
		短煙道比率			0.0%	0.0%	33.3%	0.0%	20.0%	44.4%	50.0%						75.0%	
上笙ヶ入遺跡	17	A							2									2
		B					1	3	1									5
		C																0
		D						2	1	2							2	7
		長煙道計					1	5	4	2							2	14
		短煙道																0
		不明						1		2								3
		総建物数					1	6	4	4							2	17
		長煙道比率					100.0%	83.3%	100.0%	50.0%							100.0%	
		短煙道比率					0.0%	0.0%	0.0%	0.0%							0.0%	

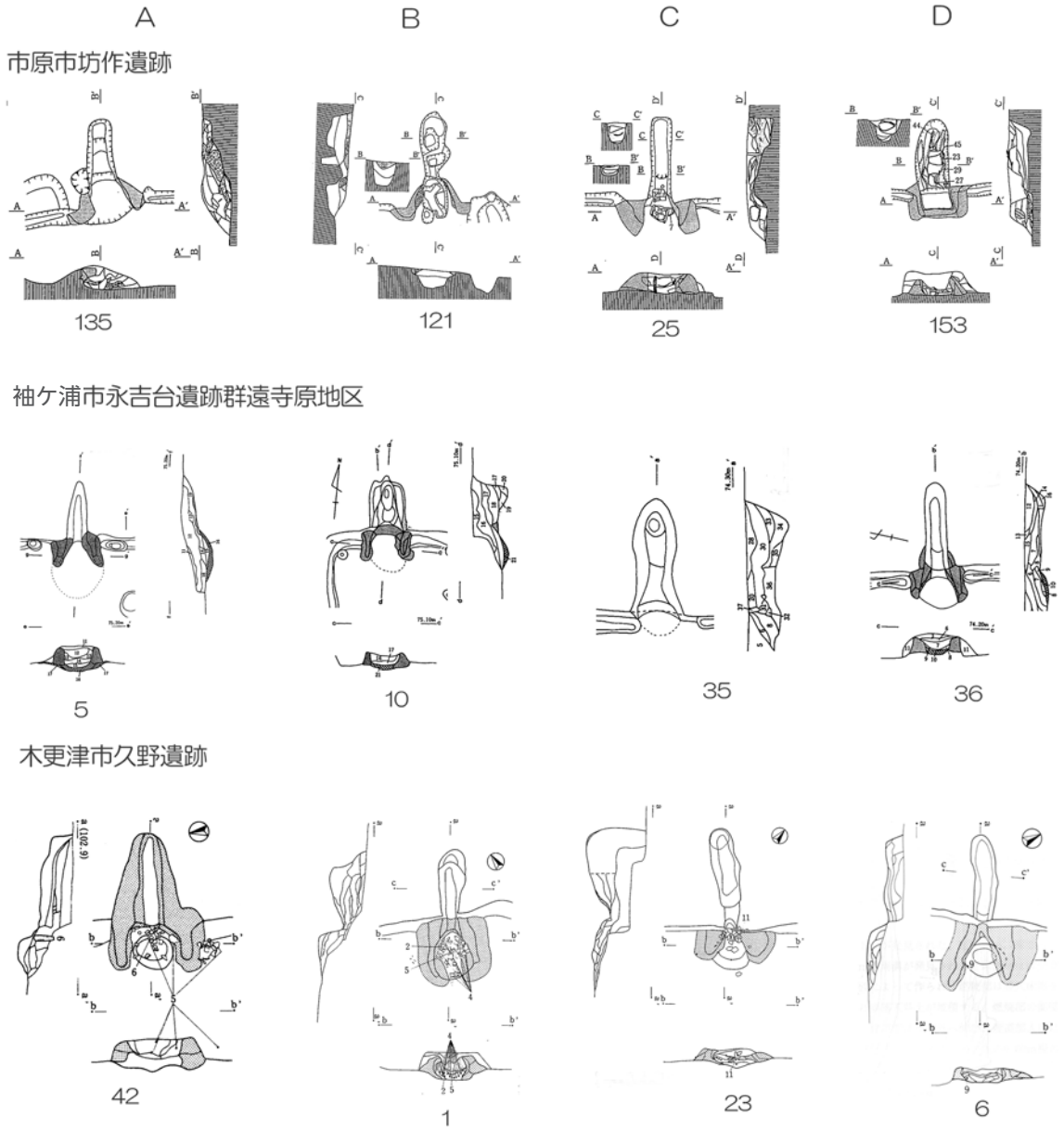


図35　タイプ別カマド集成図
※カマド図下の数字は各遺跡の竪穴建物番号

5　各市の特徴

市原市

竪穴建物跡が最も多く検出された上総国分僧寺は、A期伽藍造営期とされる741～740年代後半、B期伽藍造営から完成期の740年代後半～760年前後、官衙的政所院の成立期である760年前後～最盛期の835年前後、政所院の衰退期から終息期の９世紀第４四半期～10世紀第１四半期、国分寺衰退と想定される11世紀後半というような推移と年代が提示されている（櫻井ほか2009）。これに竪穴建物の推移をあてはめてみると、集落のⅡ期及びⅢ期は、A期伽藍造営期から完成期とほぼ重なり、伽藍建立に関わった集団の竪穴建物と想定することができる。竪穴建物数が少なくなるⅣ期～Ⅵ期は政所院が安定して維持されていた期間に相当する。竪穴建物が激増するⅦ期・Ⅷ期は主要伽藍の火災や政所院の衰退・終息期にあたり、集落が広く展開する状況下にあったものと思われる。11世紀に入ったⅫ期以降集落も縮小し、２度目の火災と国分寺衰退期にあたるⅩⅢ期には古代の集落も終息する。このように、上総国分僧寺の集落は、国分僧寺造営と関わる集団として形成され、国分寺の盛衰の影響を受けながら推移していったことが明らかとなった。

国分僧寺との関わりが指摘される荒久遺跡Ｂ地点も大規模な集落で、僧寺よりやや早く竪穴建物が出現するが、興味深いのは、僧寺の竪穴建物が減少するⅣ～Ⅵ期に建物数が増加している点である。この期間は、前述したように政所院が安定していた時期で、政所院の維持や管理に関わっていた集落は、造営期の寺域内から隣接する荒久遺跡へと移行していったことが考えられる。長煙道カマドのこの期間をみてみると、僧寺では短煙道が主体的であるのに対し、荒久遺跡では50％以上が長煙道で、Ⅳ期では69％が長煙道となる。後で述べるように、長煙道カマドを付設する竪穴建物が移配された生産技術を有する俘囚の存在を示すものであるとすると、まさに国分僧寺の造営から維持・管理に関わった状況を伺うことができる。

上総国分尼寺との関係が想定される坊作遺跡の集落は荒久遺跡Ｂ地点とはやや異なった様相を呈する。集落の出現は両者ともⅠ期であるが、隆盛時期は坊作遺跡がⅡ期、荒久遺跡がⅣ期となる。前述したように、僧寺の造営時期は寺域内、官衙的政所院の成立期であるⅣ期に荒久遺跡へと集落を移行して僧寺の維持・管理に関わっていた。一方、坊作遺跡はⅡ~Ⅷ期まで安定した集落規模を有する。尼寺も僧寺と同様仮設的な掘立柱建物を中心に構成されるＡ期と、主要伽藍が瓦葺きの基壇建物に建て替えられ、整備されたＢ期という変遷を辿る。尼寺寺域内の集落の様相が明らかでない現状では推測となってしまうが、Ａ期の造営、Ｂ期の建て替え及び整備ともに大きく関与したのが尼寺の北側に位置する坊作遺跡となる可能性が高い。長煙道カマドが竪穴建物跡数の50%以上を占める時期はⅢ~Ⅵ期となる。

「國厨」・「京」などの墨書土器や多量の施釉陶器の出土、官衙的な建物配置を示す掘立柱建物群などから上総国府との関係が想定される稲荷台遺跡は、検出された建物数はそれほど多くないが、集落の出現時期であるⅡ期は２棟とも短煙道で、市原市内のほかの遺跡とは異なる状況を呈している。竪穴建物が増加するⅢ～Ⅶ期までは長煙道が主体であるが、Ⅷ期以降は短煙道が多くなる。

袖ケ浦市

永吉台遺跡群を構成する西寺原地区と遠寺原地区は、小支谷を挟んで隣接する２つの舌状台地上に所在し、集落の動向からも密接な関係が想定される。遠寺原地区の竪穴建物数はそれほど多くないが、Ⅱ期から出現した集落はⅣ期から安定的な規模を有し、Ⅷ期頃までその状況は継続する。長煙道カマドは出現時

期からⅦ期頃まで主体的な存在を示している。この遺跡の大きな特徴は、Ⅳ～Ⅷ期に機能していた寺院の存在で、４間×５間（掘立柱建物から礎石建物へ建て替え）の四面廂建物を中心に規則的な配置を示している。寺院の機能していた期間は、長煙道カマドが竪穴建物の90％ほどを占めており、寺院の造営と維持･管理に大きく関わっていたことが明らかである。また、寺院機能が終息に向かうⅧ期には短煙道が50％となり、以降は長煙道が姿を消している。

一方の西寺原地区は、遠寺原地区から遅れたⅣ期に集落が出現するが、Ⅵ・Ⅶ期の規模の拡大や、長煙道カマドが主体となる期間は遠寺原地区と類似した様相を呈している。おそらく、西寺原地区の当該期の集落は、遠寺原地区の集落と一体となっていたことが想定される。この地区の注目される点は、60基の土器焼成遺構や約20棟の生産工房を伴う土器生産である。９世紀後半代から10世紀にかけて盛んに行われた土器生産の時期は､集落が安定的に継続するものの短煙道カマドが主体となる時期であり､その生産を担った集団の生活様式の変化が特徴的である。

上大城遺跡Ⅰ・Ⅱと八重門田遺跡も永吉台遺跡群の西寺原地区と遠寺原地区に類似した状況である。上大城遺跡はⅢ期から集落が形成され、Ⅳ～Ⅵ期に安定した規模を呈し、その期間はほぼすべての竪穴建物が長煙道カマドを設けている。この遺跡では、９世紀前葉頃の４個体分の瓦塔を伴う仏教関連遺物がまとまって出土しており、遠寺原地区のような寺院建物は検出されなかったものの、この時期仏教的な要素が強い集落となっていたことが考えられる。一方､「春部」（春日部）の存在を示す多文字人面墨書土器の出土も注目される。『日本書紀』安閑元（534）年四月条の、伊甚国造が贖罪のため春日皇后に屯倉を奉った伊甚屯倉の設置記事や､『日本三代実録』貞観九（867）年四月廿日条の「上総国夷灘郡人春部直黒主売」により、太平洋岸の夷隅の地に春日部・春日部直が分布していたことが想定され、さらに多文字人面墨書土器の出土から、東京湾岸の海上郡域にも及んでいたことが明らかとなった（栗田2021）。春日部については、大国造道嶋宿祢嶋足の申請に基づく陸奥国内の郡領クラスの有力者に対する一括賜姓記事として、『続日本紀』神護景雲三（769）年三月条にある「賜姓（中略）牡鹿郡人正八位下春日部奥麻呂等三人武射臣」が注目される。「武射」は、「地名＋臣」の地名部分に相当する可能性が高く、現在の山武市周辺に比定される和妙類聚抄記載の「上総国武射郡」を指すと考えられる。上総国と陸奥国牡鹿郡との関係を示すものであろう。

八重門田遺跡は、上大城遺跡のピークの時期に相当するⅣ・Ⅴ期のみに集落が形成され、すべて長煙道カマドを採用している。この時期集中的に製鉄が行われていることが大きな特徴である。上宮田台遺跡も八重門田遺跡同様、短期間に集中的に製鉄が行われていたことが明らかとなっている。

木更津市

本市では、久野遺跡のあり方が重要な鍵を握っている。Ⅲ期に集落が出現するが、この時期に基壇建物や掘立柱建物で構成される山林寺院の建立が確認され、次期には寺院域の拡大も認められる。拡大の時期には鉄器生産の鍛冶遺構がまとまって営まれ、寺院の補修等に利用されていたようである。寺院が機能している期間は長煙道カマドを有する竪穴建物がほとんどであるが、Ⅷ期以降は短煙道カマドが多くなり、この頃に寺院も姿を消すものと思われる。上箕ヶ入遺跡は竪穴建物数が少ないものの、久野遺跡と類似した性格の集落であり、ほぼすべてが長煙道カマドとなる。

6　長煙道カマドの動向と歴史的背景

今回取り上げた遺跡に共通する点は、上宮田台遺跡で７世紀代に集落がみられるものの、空白期間を挟んだ８世紀後半に再び集落が営まれることも含めて、古墳時代から継続した集落はなく、すべて８世紀代になって集落が出現する点である。Ⅰ期から竪穴建物がみられるのは荒久遺跡と坊作遺跡であるが、各遺跡１棟のみで、全体的にはⅡ期ないしⅢ期、8世紀中葉前後にある程度の規模の集落が形成される傾向にある。特に、上総国分僧寺や坊作遺跡は、この時期急激な集落の拡大が確認される。長煙道カマドは集落出現段階から各遺跡で主体的にみられるという共通した状況が伺われる一方で、長煙道から短煙道に移行していく時期もまた注目される。

長煙道に対する短煙道の比率が高くなる時期をあげてみると、上総国分僧寺はⅣ期、荒久遺跡はⅧ期、坊作遺跡はⅦ期､稲荷台遺跡はⅧ期となる｡僧寺がほかの遺跡に比べてかなり早い時期に短煙道が多くなっているが、僧寺と荒久遺跡を一体として捉えるならば、Ⅷ期が比率の逆転する時期と考えられる。袖ケ浦市では、永吉台遺跡群の西寺原地区がⅧ期、遠寺原地区がⅧ期からⅨ期にかけて、上大城遺跡がⅦ期で逆転しているが、八重門田遺跡・上宮田台遺跡は長煙道カマド主体で集落が消滅している。木更津市の久野遺跡ではⅧ～Ⅸ期、Ⅷ期に消滅する上箕ヶ入遺跡では短煙道が１棟も確認されていない。以上の状況から、長煙道カマドの竪穴建物から短煙道カマドの竪穴建物へと変化していくのはⅧ期からⅨ期にかけての時期となる。

上述した長煙道と短煙道カマドの変遷に目を向けると、長煙道カマドを伴って集落が出現する８世紀中葉前後と、長煙道カマドから在地の短煙道カマドに移行していく９世紀末～10世紀初頭頃の２つの画期が注目される。この画期を文献上の出来事と照合すると興味深い状況を伺うことができる。第１の画期の８世紀中葉前後の記事には､｢俘囚｣移配がこの頃から始まったことがみえる。初見記事としては『続日本紀』神亀二（725）年の陸奥国から伊予国・筑紫・和泉監への移配があり、天平十（738）年の陸奥国から摂津職『駿河国正税帳』・筑後国『筑後国正税帳』へ、『続日本紀』宝亀七（776）年の陸奥国から大宰府管内へ、出羽国から大宰府管内・讃岐国・京への移配が確認できる。西海道の集落遺跡における移配俘囚の足跡を論考した松村氏は、豊前国の福岡県京都郡刈田町黒添・赤木遺跡（８世紀中頃～後半)、筑前国の福岡県福岡市博多区雑餉隈遺跡（８世紀後半主体)、肥前国の佐賀県神埼郡吉野ヶ里町浦田遺跡（８世紀後半～９世紀初頭）を取り上げ、長煙道カマドと東北系黒色土器の存在から移配された俘囚に関連する集落と想定された（松村2013)。特に、黒添・赤木遺跡は部分的な調整であるが、検出された当該期の竪穴建物６棟のうち不明を除く５棟が長煙道カマドを有しており、移配された俘囚が集落の出現に関わっている可能性が高く、その点では上総に近い状況を呈している。また、58棟の竪穴建物が検出された雑餉隈遺跡では、長煙道主体から短煙道主体へと変遷していく状況が伺われ、この点も上総と類似した傾向を呈している。上総に関しては、この頃の移配の記事はみられないものの、市原郡～望陀郡の集落出現段階から長煙道カマドの竪穴建物が主体となる状況から、九州と同様に当該期に俘囚の移配が行われていたことを想定しても大過ないと思われる。

第２の画期で注目されるのは、９世紀後半に勃発した上総国の俘囚の反乱である。その背景については明確ではないが、上総に移配された俘囚の在地での生産活動をはじめとした労働にあった可能性が考えられる。今回取り上げた市原市から木更津市の長煙道カマドを多く含む遺跡には、俘囚として移配された一

定程度の集団が存在しているとともに、いくつかの共通点が伺える。第１は、それまで空閑地であった台地上に８世紀中頃以降大規模な開発を伴って新たな集落が形成される点、第２は集落内あるいは周辺に寺院が営まれる点、第３は製鉄や土器焼成といった生産遺構が伴う点である。俘囚集団を管理する国司や郡司などの主導のもとに、移配された俘囚集団は、国分寺や山林寺院の造営、製鉄・土器などの生産、土地の開発などの重要な労働力として位置づけられたと推測される。上総で起こった俘囚の反乱は、このような扱いに対する不満などが大きな要因になったのであろう。上総以外では下総や出雲での反乱の記事があるが、移配された多くの国では反乱記事は確認できず、そこに反乱が多発する上総の俘囚の性格を垣間見ることができるのではなかろうか。この点で注目されるのが上大城遺跡から出土した「春日部直」の墨書土器である（図36）。陸奥国牡鹿郡内に比定される宮城県東松山市赤井遺跡から出土した「春□」の刻書土器（図37）などを含めて、春日部氏は上総国武射郡から牡鹿郡に移住した一族と考えられ、出身地であ

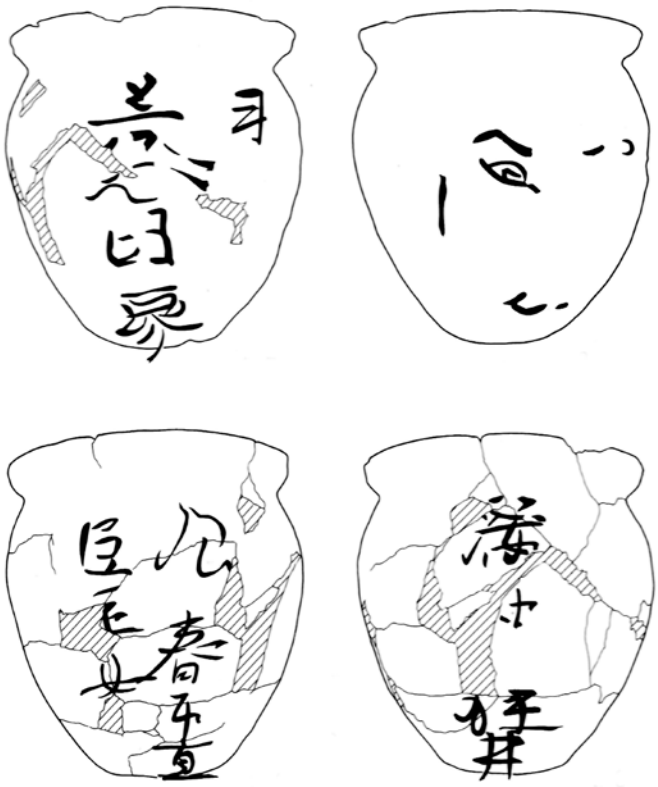


図36　袖ケ浦市上大城遺跡出土墨書土器

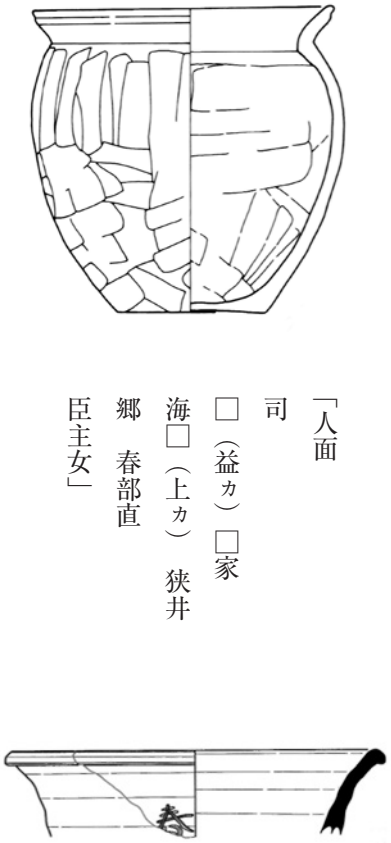


図37　宮城県赤井遺跡出土墨書土器

る太平洋岸地域と太いネットワークを有していた可能性が高い。推測の域を出ないが、上大城遺跡周辺に移配された俘囚集団と春日部直との関係が俘囚の反乱の一つの背景として捉えることもあながち間違いではないように思える。その後、上総での俘囚の反乱が終息するとともに、集団の解体的な状況が具現化し、在地的な短煙道カマドへと急速に移行していったものと思われる。永吉台遺跡群西寺原地区のように短煙道カマドが主体となる時期にも土器生産が行われている点は、俘囚集団の解体のなかでも生産活動は継続していたことを伺わせる。

一方で、俘囚料の記載から国内の多くの地域に俘囚が移配されていることが想定されるが、長煙道カマドが主体的に採用される地域はむしろ少ない。これについては、下総地域の報告をした郷堀氏が、「移配された俘囚は、移配先で農民として住み暮らし、移配先での生活用具を使用することで集落内に同化していくことも多かったのではないかと想像される。」（郷堀2017）と述べているように、それぞれの移配先で在地化した生活を送っていた俘囚が多かったのではないかと考えられる。

上総の俘囚がどの地域から移配されてきたのかも重要な課題であるが、現段階では明確な判断ができない。ただ、今回検討に加えた長煙道カマドのＡ～Ｄのタイプが一つの手掛かりになりそうである（図38・39）。今回取り上げた遺跡では、Ｂ・Ｄがそれぞれ約40％、Ａ・Ｃがそれぞれ約10％で、煙道部が下方に延びるＢと水平に延びるＤが全体の80％ほどを占めている。この傾向と類似した比率を示す東北の地域は現状では確認できないが、Ａが少なく、Ｄが多いという点に限ってみれば、岩手県の紫波や胆沢周辺が当てはまる可能性もある。岩手県は東北の中でも長煙道カマドの比率が高く、上総との関係を想定した陸奥国牡鹿郡が所在しており、移配された俘囚集団の有力な候補として、紫波・胆沢周辺をあげておきたい。

図38　北東北の地区
（北東北古代集落研究会2014）

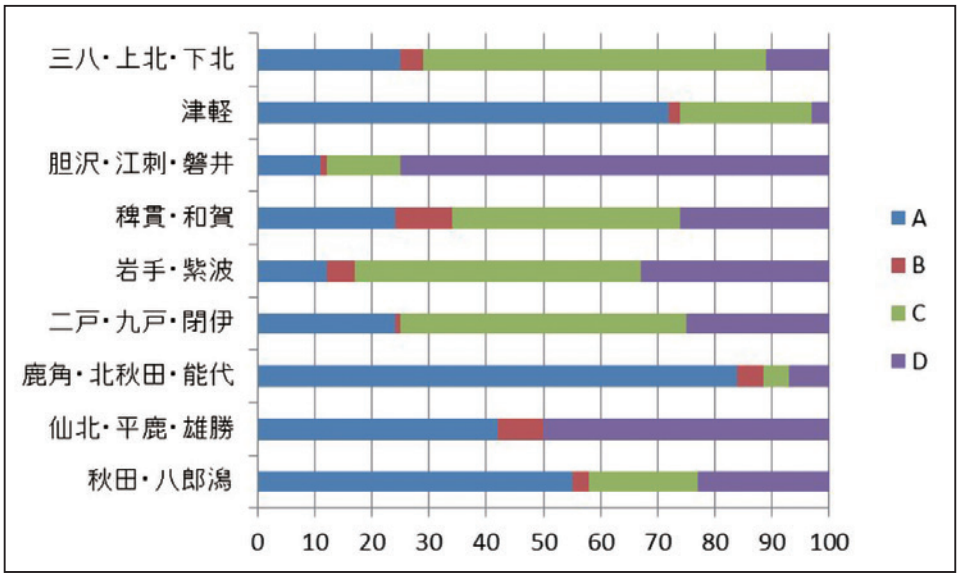


図39　北東北各地区のカマドタイプ別一覧
（村田2017をもとに作図）

7　おわりに

本稿は、東北地方の竪穴建物の大きな特徴である長煙道カマドを対象として、房総では卓越した分布状況を示す上総北西部地区の市原市・袖ケ浦市・木更津市の主な遺跡を検討した結果、文献史料で確認される俘囚の移配の動向と関連した集落の画期を伺うことができた。第一の画期とした８世紀中葉前後では、陸奥や出羽国からの西国への俘囚の移配が『続日本紀』などで確認され、今回分析対象とした上総国の主な遺跡の集落出現時期がほぼ同時期で、出現段階から長煙道カマドを主体的に付設していることから、西国への俘囚移配と同じ頃に少なくとも上総北西部地域に俘囚が移配されていた可能性が高いことが想定された。また、８世紀中～後半の集落である福岡県の黒添・赤木遺跡では出現段階から長煙道カマドがほぼすべての竪穴建物に設けられており、上総北西部ときわめて似通った様相を呈していることから、それぞれの地に移配された俘囚集団の類似性も考慮すべき点である。

第二の画期としてあげた９世紀後半頃は、今回取り上げた遺跡の長煙道カマドから短煙道カマドへと急速に移行した時期であり、嘉祥元（848）年から元慶七（883）年の間に繰り返し勃発した上総国での俘囚の反乱の時期でもある。律令国家によって反乱が鎮圧されるとともに、俘囚集団の徹底的な解体などが進んだことが、俘囚の故地の住居形態の大きな特徴である長煙道カマドが姿を消して在地化した短煙道カマド主体の集落へと変化していった一つの要因として考えた。

一方、上総国に移配された俘囚は、彼らを管理・掌握する国司や郡司などの主導のもとに、国分寺や山林寺院の造営、製鉄や土器などの生産、土地の開発などの重要な労働力として位置づけられていた可能性が高いことも指摘した。

今後は、以前取り上げた房総における古墳時代後期の東北と関連すると思われる遺物（栗田2020）や平安時代の蕨手刀（栗田2021）などの要素を加えた解明とともに、上総国へ移配された俘囚の故地と想定される岩手県の事例や、俘囚の痕跡が伺われる北部九州を含めた西日本の事例をさらに検討していくことを課題としておきたい。

参考文献

相澤秀太郎ほか　2019『蝦夷－古代エミシと律令国家－』東北歴史博物館開館20周年記念・宮城県多賀城跡調査研究所設立50周年記念　特別展図録　東北歴史博物館
浅利幸一　2003『上総国分寺台遺跡調査報告Ⅸ　市原市稲荷台遺跡』㈶市原市文化財センター
糸原　清ほか　1999『矢那川ダム埋蔵文化財調査報告書２－木更津市久野遺跡－』㈶千葉県文化財センター
甲斐弘幸ほか　2007『上箕ヶ入遺跡発掘調査報告書』木更津市教育委員会
北東北古代集落研究会　2014『９～11世紀の土器編年構築と集落遺跡の特質からみた、北東北世界の実態的研究』
北見一弘ほか　2011『上総国分寺台遺跡調査報告XVI　市原市荒久遺跡Ｂ・Ｃ地点』市原市教育委員会
熊谷　公男　1992「道嶋氏の起源とその発展」『石巻の歴史』第六巻 特別史編　石巻市
栗田則久　2017「上総国における俘囚集落の検討－移配先の地域と集落機能－」『「俘囚・夷俘」とよばれたエミシの移配と東国社会－強制移住させられたエミシはどこに居たのか？そして何をしていたのか？－』帝京大学文化財研究所・山梨県考古学協会
栗田則久　2020『北方交流録－北とつながる五つの物語－』令和２年度出土遺物公開事業図録　(公財)千葉県教育振興財団
栗田則久　2021「集落からみた俘囚移配の様相（予察）－上総の長煙道カマドの検討から－」『研究連絡誌』84号(公財)千葉県教育振興財団
小出紳夫ほか　2002『上総国分寺台遺跡調査報告Ⅵ　坊作遺跡』市原市教育委員会
郷堀英司　2017「下総国における俘囚移配を示す考古資料の検討－長煙道カマドの検討－」『「俘囚・夷俘」とよばれたエ

ミシの移配と東国社会－強制移住させられたエミシはどこに居たのか？そして何をしていたのか？－』帝京大学文化財研究所・山梨県考古学協会
櫻井敦史ほか　2009『上総国分寺台遺跡調査報告XIX　上総国分僧寺跡１』市原市教育委員会
佐々木義則・早川麗司　2017「茨城県における東北地方からの移民の痕跡－長煙道カマドと東北系遺物から俘囚移配を考える－」『「俘囚・夷俘」とよばれたエミシの移配と東国社会　強制移住させられたエミシはどこに居たのか?そして何をしていたのか？』
佐藤敏幸　2019『赤井遺跡　発掘調査総括報告書Ⅱ－館院編－　－古代牡鹿柵・牡鹿郡家・豪族居宅跡推定地－』宮城県東松島市教育委員会
田尾誠敏　2017「神奈川県における俘囚移配の痕跡を探す－相模国域の事例を中心に－」『「俘囚・夷俘」とよばれたエミシの移配と東国社会－強制移住させられたエミシはどこに居たのか？そして何をしていたのか？－』帝京大学文化財研究所・山梨県考古学協会
武廣亮平　2017a「文献史学からみた移配国における俘囚と夷俘」『「俘囚・夷俘」とよばれたエミシの移配と東国社会－強制移住させられたエミシはどこに居たのか？そして何をしていたのか？－』帝京大学文化財研究所・山梨県考古学協会
武廣亮平　2017b「古代エミシ移配政策とその展開」『専修大学古代東ユーラシア年報』第３号
立平遼平　2022「鹿島郡の俘囚痕跡に関する一考察　－長煙道カマドからみえること－」『茨城県考古学協会誌』第34号　茨城県考古学協会
豊巻幸正ほか　1985『永吉台遺跡群』㈶君津郡市文化財センター
豊巻幸正ほか　2005『袖ケ浦椎ノ森工業団地内埋蔵文化財調査報告書　上大城遺跡・八重門田遺跡』㈶君津郡市文化財センター
鶴岡英一ほか　2016『上総国分寺台遺跡調査報告XXⅦ　上総国分僧寺跡２』市原市教育委員会
平川　南　1992a「海道・牡鹿地方」『石巻の歴史』第六巻 特別史編　石巻市
せられたエミシはどこに居たのか？そして何をしていたのか？－」帝京大学文化財研究所・山梨県考古学協会
平野　修ほか　2017a『「俘囚・夷俘」とよばれたエミシの移配と東国社会－強制移住させられたエミシはどこに居たのか？そして何をしていたのか？－』帝京大学文化財研究所・山梨県考古学協会
平野　修　2017b「武蔵と甲斐における俘囚・夷俘痕跡」『「俘囚・夷俘」とよばれたエミシの移配と東国社会－強制移住させられたエミシはどこに居たのか？そして何をしていたのか？－』帝京大学文化財研究所・山梨県考古学協会
松村一良　2013「西海道の集落遺跡における移配俘囚の足跡について－豊前・筑前・筑後・肥前４国の事例を中心にして－」『内海文化研究紀要』41号　広島大学大学院文学研究科附属内海文化研究施設
宮原武夫　2001「蝦夷戦争と俘囚の反乱」『千葉県の歴史通史編　古代２』千葉県
村田　淳　2017「東北地方北部における竪穴建物のカマド－構造と分布について－」『古代の竪穴建物跡－機能と構造』岩手考古学会第49回研究大会資料
村田　淳　2018「盛岡市「盛南地区遺跡群」における平安時代竪穴建物」『岩手考古学』第29号　岩手考古学会
安井健一　2008『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書－袖ケ浦市上宮田台遺跡１：弥生時代以降－』（公財）千葉県教育振興財団